

---

# ライダーのいる街

浜田碌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ライダーのいる街

### 【Nコード】

N73960

### 【作者名】

浜田碌

### 【あらすじ】

人類の自由のために日夜戦う正義の味方・・・にさせられた男の物語。世界征服を掲げるはた迷惑な組織を追い、今日もたった一人で立ち向かうのだった。

## 序章 悪夢の始まり

東京郊外のとある街に、ある立派な屋敷があった。日本有数の財閥の屋敷で、純和風の造りに大きな庭園があった。その庭園に一人の男性が立っていた。

男は二十代前半の華奢で大人しい風貌の青年で、名前を日下部敏夫くさかへとと言った。彼の父は一代でこの財閥を創り上げ、昨年に病没。財産の全てを息子の敏夫に譲ったのだった。

敏夫はと言うと、財産にはあまり興味も無い様子で、父の代から仕えている部下に財閥の運営を任せ、ぼんやりとした生活を続けていた。

何不自由はない。やろうと思えば資産を使って何でもできる。だが何をしようか？

この何をするか、をずっと考え込んでいるのである。

彼は体は丈夫では無いが故にとても読書が好きだった。特に物語の中でも勧善懲悪のものが好きだった。テレビのヒーロー物も欠かさず見ていた程だ。それらが虚構であるとわかる年齢になっても、その世界観に憧れていた。

だが、それに比べてこの現実と言うものは。

一言で言えばつまらないのである。悪を蹴散らす正義の味方はいない。と言うか世界征服とかの壮大な企画を打ち出す悪の組織なんていないのだから。正義の味方は必要とされていないのだった。

……だったら必要にされればいいのではないか。

この考えに至った時、あるアイディアが浮かんだ。

「爺。ちよつと来てくれないか」

縁側から屋敷内へ声をかけると、初老の紳士がすぐに表れた。

「坊ちやま、お呼びでしょうか」

「ああ、一つやりたい事ができたんだ。少しお金と人手が要る。用意して欲しいんだ」

それを聞くや、爺と呼ばれた男の顔がぱつと明るくなった。

「おお、ついに坊ちゃまも何かする気になれましたか！先代様の亡くなった後、ずっと元気が無いので爺はもう心配で心配で……」  
嬉し泣きを始めそうになった爺は敏夫になだめられて気を取り直した。

「して、何を始められるのですかな？この爺、坊ちゃまのために小国家一個分の資金と人員をいつでも使えるように準備させております故、心配は無用です」

その事実には半ば驚いたが、好都合だ。

「では、それを使わせてもらつよ」

「何に使われますので？」

その問いに敏夫はさらつと答えた。

「世界征服」

それからしばらくして。

夜の街を一台のオートバイが走っていた。

運転手は二十代前半の男性で、スマートながらも体格の良い、誠実そうな青年だった。

人通りのほとんど無い住宅地の外れの道だった。街頭もまばらで所々薄暗い。ふと脇を見ると、路地裏に続く道に人が倒れているのが見えた。

すぐにオートバイを傍に止めると、駆け寄って抱き起した。見ると女性だった。

「もしもし、大丈夫ですか！」

問い掛けには答えなかった。しかし珍妙な格好をしている女だった。全身黒ずくめで絵描きの様なベレーを被っていた。しかも顔に赤いペイントをしている。

……何かのコスプレだろうか？とにかく助けなければ。

「今、救急車呼びますから！」

そう言つて振り返つた瞬間、後頭部に鈍い衝撃が走つた。感覚が無くなり、視界が逆転して地面に倒れ込む。その瞬間さつき抱き起した女の顔が見えた。意識があつたのはそこまでだった。

目が覚めた時、男は身動きが取れなかった。

目を開ければ天井には眩い照明。手足は何かで固定され、大の字に寝かせられていた。周囲を見ると、今度は白衣を着た人間が何人も立っていた。仮面をしているせいで顔がわからない。ただ目だけが冷たく見下ろしている。

仮面の一人が話始めた。

「目が覚めたかね、西条忠君<sup>さいじょうただし</sup>」

「誰だお前は！何で俺を知っている？」

「お前は我々のコンピュータが弾き出した最良の実験材料だ。データは全て揃っている」

「実験材料だと……一体何を……」

「お前は生まれ変わる。そして組織のために尽くすのだ。なに、すぐ済むさ、すぐにな……」

そう言つと西条の腕に何かを注射した。

「う……や、やめろ……」

そして再び意識を失うのであつた。

続く

## 始動

少し話は遡る。

敏夫は、まず彼の住む緑山町にある河川敷に地下基地を建設した。爺の用意したマンパワーと資金を利用すれば容易なことだった。迷路のごとく続く通路、無数の罠。いかにも「悪の要塞」と言った仕上がりだ。

そして自分の財閥の医学・生物科学部門の技術者を集め、人体改造技術の研究施設を置いた。これだけは絶対必要なんだそう。彼らには白衣と白い仮面の装着を義務付けた。

その他の作業員・社員は戦闘員とした。黒ずくめの服に絵描きベレー、そして顔にペイント又は目を覆うマスクの装着をコスチュームとしたのだ。

あまりにも「まんま」過ぎるので誰か反発しそうなものだが、肝心の当主の意向である。大人しいはずの坊ちゃんが急に張り切っているのも誰も文句を言えなかった。一番の側近である爺はというと「坊ちやま……！この行動力、統率力！これこそ、これこそ部下家を継ぐ者ですじゃ……！」

などと感涙している。手に負えない。誰か止める。

他の者の心配など気にもせず、当の敏夫は完成間近の基地を視察していた。前に比べると元気そうである。ご機嫌である。

「いいじゃないか。では、そろそろ始めようか……」

これからの準備のため、俊夫は基地内の自室へと歩き出した。

数時間後、全ての人員が地下階の大広間に集められた。

居並ぶ人、人、人……全員が黒か白の衣装をまとい、一糸乱れず整列していた。まさしく「軍団」と言うに相応しい。

一同が待つ中、壇上に敏夫と爺が現れた。だがその姿を見た途端、一瞬だがどよめき起きた。

理由は彼らの格好にあった。

敏夫はまるでナチスの将校の様な制服を着込み、何故か眼帯をして乗馬鞭を携えていた。

爺は黒いマントで全身を覆い、中は白のタキシードという怪しすぎる服装だ。敏夫に忠誠を誓っている彼はもう何だつてやるつもりなのだろう、表情に気迫が籠っている。

さて、敏夫はと言うと、壇上に登るや否や全員に向けて号令した。「我が優秀なる日下部財閥の諸君！地下基地の設営、大変ご苦労であった。制服の改変等、戸惑うことも多かったと思う。ここで全てを諸君に明かそうと思う」

はつきり言つてほとんどの者が状況を理解しないままここまで来たのだが。敏夫は続ける。

「今、この世界を鑑みるに、一言で言うならば”夢が無い”じゃないだろうか。不況に続き社会は荒れ、人々は誰も将来に期待を持てない。夢を持てない時代なのだ！これで良いはずがあるうか！否！あるはずが無い！」

突然の熱弁に誰もがポカンとしていた（爺と一部の者は感動していたが）。

「そこで私は考えた。父が残したこの財閥、この力。これを世のために使えないものかと！そう、我々には力がある！優秀なる諸君等と力を合わせれば、我々に不可能は無い！共に世界を変えようではないか！」

あまりに堂々としている俊夫の演説に彼らは少しづつ心を打たれていた。その思いは次第に歓声となって表れていった。

敏夫は汗を流しながら独裁者ばりの演説を続ける。

「私は決心した！本日、ただ今を持つて、日下部財閥を解散する！そしてこの基地を元に秘密結社「BAD」を結成する！皆で力を合わせて日本を、やがては世界を征服するのだ！！」

ここまで言い切つて歓声は最高潮に達した。誰もが熱狂している。最後にとんでもないことを言っているのだが。

敏夫は少し声を落着けて言う。

「秘密結社となる以上、我々の存在は必ず秘匿されなければならない。よって私はここでは大幹部・ヘル大佐と名乗ることにする。爺は「博士」だ。科学班の指揮を執れ」

「はっ！」

もう完全に悪役モードに入っている。敏夫……いや、ヘル大佐はそこまで言うとは踵を返し、悠然と退場して行つた。広間の社員、いや、戦闘員たちは教えてもないのに右手を高く掲げた色んな意味で危ない敬礼をしてそれを見送つた。

部屋に戻つて椅子に腰掛けると、どつと疲れが出た。まあ楽しかつたのだが、慣れないことは疲れるものである。

「ふう……これで”こちら”の準備はほぼ整つた。あとは……」  
被つていた帽子を部屋の隅の帽子掛けに放り投げながら呟いた。

「あとは、”正義の味方”の準備だな」

そして西条青年の悲劇へと繋がるのであつた。

続く。



## 始動（後書き）

秘密結社BADとは、B暴力的にA悪事を働くD団体 なんだそうです・・・

## 脱出

地下基地の機能も完備したところで彼らは次の行動へと移った。

大幹部たる敏夫の命令により、超人的能力を持つ改造人間の製造が始まったのだ。問題は誰を改造するのか、だったが、敏夫は外部の人間を捕獲して素材とする様に指示を出した。人選は科学班を指揮する爺に任せた。

敏夫はその第一号となる候補に「正義感ある強健な男性、要大型二輪免許」という条件をつけた。後半は謎だが、敏夫曰く絶対必要なんだそうだ。

そして秘密結社BADの科学班が誇るコンピュータが弾き出した人物こそが西条忠だったのだが。

敏夫は改造されたのが誰だったのかは知らなかった。

「坊ちゃ……いや、大佐。入ります」

敏夫の自室に爺（博士）が入ってきた。敏夫はとりあえず椅子を勧めつつ聞いた。

「その後はどうなったかな？博士」

「被験体の確保には成功致しました。コンピュータは大佐の条件に合致した人物を見つけ出しましたし、現在改造手術も順調のところです」

それを聞いた敏夫は満足気に頷いた。

「いいね。手術はあとの位かな」

「概ね、二時間程で終わるでしょう」

時計を確認して敏夫は立ち上がった。

「解った。その頃には見に行くよ。爺……いや、博士は作業に戻ってくれ」

「はっ」

急々と退室する博士を見送ると、敏夫は自分の机の一番下の引き

出しを開けた。そこは物を入れる空間では無かった。何かのボタンやダイヤルがびっしり並んでいる。何がどうなっているのかは、敏夫しか知らないのだ。彼はダイヤルで時間を設定して、一番右上のボタンを押した。時間のダイヤルはきっかり二時間後を指していた。

二時間後。

完成したばかりの地下基地にけたたましくサイレンが鳴り響いていた。通路を走りまわる警備の戦闘員、状況報告を求める放送。大騒ぎである。敏夫ただ一人を除いて。

博士が大慌てで敏夫の部屋に飛び込んできた。

「大変です大佐！被験体一号が脱走しました！」

彼にはわかつていたことなのだが、一応驚いておく。

「何だつて！？どうしてそんなことになったんだ！」

「被験体を拘束していた固定具が手術の完了と同時に……外れました。誤作動など起こり様が無いのですが……」

汗を拭いながら話す博士を見て少し気の毒になったが、まあそれはそれだ。

「起きてしまったものは仕方がない。とにかく、そいつを捕まえなくてはね」

「しかしながら、手術は大成功だった様です。故に手がつけられません」

ふむ、と考え込む敏夫。本音としてはとりあえず外に出てもらわねば。あれを準備しておこう。

その頃。

「くそつ、ここは一体どうなっているんだ！？」

迷路の様な通路を駆け巡りながら、西条青年は悪態をついた。改造された自分の体の異様さにも驚かされていたが、運良く脱出できた今はそれ所ではない。早く逃げなければ。

通路の角から敵の戦闘員が飛び出してきた。構わず体当たり。勢い良く吹き飛ばされた敵は気を失ったのか動かない。西条の動きは全く人間離れしたものだ。それもそのはずか、科学技術の粋を集めて作られた人工筋肉が埋め込まれているのだから。

自分の体をよく見る時間は無かったが、緑色の人工筋肉の胴体に黒のスーツ。回転プロペラのついたベルトに白の手袋にブーツといった良く分からない服装だった。なぜか赤いマフラーまで付けられている。

これらのおかげなのか、非常に体は軽かった。戦闘員も追いつかない。何とか逃げられそうである。

なんとも同じような通路を通り抜けたところで、上へと続く長い坂道に入った。もしかしたら出口かも知れない。そして坂道の途中で一台のオートバイを発見した。白いボディの大型バイクだった。

「しめた。こいつを拝借して行こう！」

西条は迷うことなくそれに跨ると、一発でエンジンをかけた。聞いたことも無いような爆音を上げて走りだす。西条自身もパワーの強さに驚いた。

そして長い坂を登り切ると、遂に外部へと出られた。周囲を見渡すと、そこは見慣れた緑山町の河川敷だった。

彼が外に出ると同時に、なんと入り口が閉まり地中へと潜ってしまった。追手はいなかった。

「こんなとこだったのか……！とにかく、身を隠そう」

奴等は自分のデータを持っていると言っていた。ならば自宅へ戻るのは危険だ。そう考えた西条はある場所を思いつき、そこへ向かうことにしたのだった。

その頃。

「申し訳ありません。新開発の車両を奪われ、逃げられた様です」  
敏夫は自室で博士から報告を受けていた。彼の思惑通りに運んだようである。これで舞台は出来上がった。

「いや、事故だったんだし。博士の責任じゃないよ」

落ち込んでいる博士をなだめる大佐。どんな格好をしても敏夫は根の優しい人物なのであった。

「とにかく被験体は必ず見つけ出さないと。そうだ、そいつを捕獲するためにまた改造人間を作ろう。その準備を頼むよ」

「はっ！直ちにかかります！」

失敗を挽回せんとばかりに、足疾に退室する博士。それを見送ると、一旦伸びをして、

「……一旦上に帰ろうかな」

そして、例の引き出しの別のボタンを押すと、後ろの壁が開いた。その向こうには通路が続いている。これは自分の屋敷へと続く秘密通路だった。彼は日下部敏夫という表の姿を捨てたわけではないので、たまに帰ることにしていたのだった。地上に残した財閥の指揮も執らなくてはならないのだ。財閥の当主であって悪の組織の大幹部。何ともスケールの大きい二足の草鞋である。彼は自分で考えて笑ってしまった。ふと敏夫の数少ない親友である幼馴染のことを思い出した。

「そういえば最近会っていないな。そうだ、たまにはあそこへ行ってみようか」

そう考えた敏夫はある場所を思いつき、そこへ向かうことにしたのだった。

続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7396o/>

---

ライダーのいる街

2010年11月12日13時29分発行